

---

# 歩く仲間

ノダメ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歩く仲間

### 【著者名】

ノダメ

### 【あらすじ】

突然あらわれた幻の世界。そこに住む、少年リドルは、ちょっとかわった少年。リドルは、自分の部屋で幽霊と出会う。幽霊は、自分の足で歩いてみたいと願い泣いた。そして、歩くことができるようになり一人は、旅にでます。

## 第一話 イムル

突然、どこか遠くに行つた様な気がする時は、ありませんか。

そう、あなたは、行つたのです。幻の世界、

「アームス」

へ。

アームスには、四つの国があります。

人間の住む

「イムル」

、幽靈が住む、

「モンク」

、天使の住む

「スズク」

、悪魔の住む

「ドーグル」

がある。

国と言つても小さな世界なので村の様なものです。

ただ、四つの国は、とても近いのに、人間には、他の国の人々を見ることができないのです。

たつた一人の少年をのぞいては、ここは、イムル。

町の中心にある緑の屋根の家に少年は、父と二人で暮らしていました。

少年の名前は、

「リドル」

、ちょっとかわりものです。

ある日のことです。

リドルは、父のビングと農作業をしているとコドルが変なことを言いだしたのです。

「ねえ、父さん。イムルってさあ人が少ないってみんな言つねばど、多いよね。まあ、ほとんど足がないけどね。」

それを聞いてビングは、リドルに「シン」と大きな音をたててげんこつした。

「またおめえは、そつだらくだらないことこつて、どうみたつていなイベ。勉強しねえから、そつたら夢みたいなことこつんだ。もつとおつむがよくなるように勉強しる。」

そう言つてそれくわとビングは、家の中にはいつていきました。リドルも、ジンジンふくれた、たんこぶを気にしながら頭をさすり、家の一階の自分の部屋へと帰りました。

## 第一話 イムル（後書き）

初めて書いた連載小説です。みぐるしことじゅも、あるとおもこますがよろしくおねがいします。

## 第2話突然の来客（前書き）

イムルに住むリドルは、すこし変わった少年、人には、見えないものが見えてしまう。

いつも父ビングにそれをいっては、怒られてしまう。

その日、部屋に戻つてリドルの見たものは・・・

## 第2話突然の来客

自分の部屋に入ると、見たこともない男の子が泣いていました。

リドルは、びっくりして、

「わあーだれだよ。なんで僕の部屋にいるの。どうせやつてはいった  
の。足ないし、幽霊なの。」

リドルは、すごいパニックを起こして、いっぺんにいろんなことを  
言ってしまいました。

すると、男の子は鼻をすすぐながら、「頬を赤く染めて口をとがせ  
幽霊って言うな。僕には、れつきとした、ストックと言つ名前が  
あるんだ。」

それに、ぼくらの世界では、足がある君の方こそ幽霊だ。」

それを聞いたリドルは、ムツとしました。

「なんでも、いいけどさ、ここは、僕の家だからでていつてくれな  
いかな。」

すると、ストックは、

「いやだ。僕のおねがいとむかのことをやまぬまでは、絶対いか  
ないよ。」

つと一人話していると、ドアの向こうからビングが

「リドル、そこにだれかいるのか。」

リドルはストックの顔を見ながら

「ううん。だれもいないよ。僕、疲れたから先に寝るよ。おやすみ。

するとビングは

「そうか。おやすみ。  
つと言ひながら 居間のほうへ戻つてきました。

リドルたちは、クスッと笑つてしましたが、すぐに、われにかえつ

てにらみあいになりました。

我慢しきれず、先にリドルが口をひらきました。

「わかつた。ごめん。話を聞くからとりあえず家をでよう。」  
ストックは、ドアをみながらうなずき、一人は、月の光がてらす窓  
を開け、家をでした。

## 第2話突然の来客（後書き）

ストックがでてきました。

今後もいろんな人？がでてきますのでたのしんで読んでください。

### 第3話 小麦畑の田舎ごこち（繪書き）

リドルは、ビングにばれなこよつにストックの話を聞くため夜の町をぐるぐると歩いていた。・・・

### 第3話 小麦畑の出会い

二人は、お互に心の中はぐるぐると複雑な気分で、月明かりの道をストックはフワフワとリドルの歩調にあわせて空を飛びリドルは歩いて町の外になりました。

町の外には、月の光が照らし、まばゆい光をはなつ黄金の小麦畑がありました。黄金の小麦畑を前に、一人は息をのみ、互に、「なんてきれいなんだろう。」

つとつぶやき、顔をみせあうと、ニヤリと笑い、ワーッと小麦畑をめがけてリドルは走り、ストックは、飛び込みました。

「なんだ、ただの小麦じゃん。だれかさんがきれいとか言つからからてつきり黄金だと思つたのに。」

がっかりして肩を落としたリドルが言いました。すると、「リドルだって言つたじやないか。それに、走り出したのはリドルの方が先だよ。」

ストックは、鼻をツンツンとあげ、リドルにせまりました。

「なつ。まあいいや。ここならだれもこないし、いいかな。それで、君のおねがいってなに?」

リドルは、怒りをぐつとこらえてストックの話に耳を傾けました。「僕、人間のように歩いてみたいんだ。リドルは、僕のこと見えるし人間は、なんでも作つてしまつて聞いたから。」

思いつめた表情のストックにリドルは、

「僕には、君が理解できないよ。君は、空が飛べるのにいろんなものが見えるのになんで歩きたいんだ。僕の夢は、空を飛ぶことそれをもつてている君がうらやましいよ。」

二人が、思いつめどうづむいていると

「暗いな。そんな夢があるならお互いにかなえちゃえぱいのによ。」

どこからか声がしました。一人は、あたりを見回しました。だれもいません。

「上だよ、上。」

二人が上を見るとそこには、漆黒の翼をつけたバイクに乗った悪魔がこちら一ヤリと笑いながら見つめていました。

### 第3話小麦畠の出来ごと（後書き）

まだまだいろいろな人が登場します。お楽しみに。

## 第4話悪魔（前書き）

小麦畠で話す一人に声をかけたのは、かわった悪魔だった

## 第4話悪魔

リドルは、驚きのあまり目をグリグリと搔いて（何か変なものを見たような。いや気のせいだ。空に人なんているわけない。そうだ、そうにちがいない。）

頭の中では、いろんなリドルが会議をはじめています。

「放心状態だなこりゃ。そっちの幽靈坊やは、平氣みたいだな。」

悪魔は、ストックに目をむけるとニヤリと笑った。

ストックは、またも、幽靈と言われ抗議しようとしたその時、雷がピカ、『ロ』ロズドーンっとものすごい音をたててリドルをめがけておちてきました。

「俺は、気が短い。放心状態もそこまでだ。単刀直入に言つ。なげえのは、嫌いだからな。俺は、おまえらが気に入つた。だからおまえらの夢を手伝つてやる。いやとは、言わせねえ。」

ストックは、悪魔のあまりにも急な話に口があいてしまい、リドルは、雷につたれて体の中にビリビリ電気がはしって目がクルクルと回ってしまいました。

「そうだ。俺の名前は、ルースだ。よろしくな。ちかいうちまた来る。」

ルースは、手を空にかかげて雷をならし行進曲をガンガンにかけると黒翼のバイクでブーンッと飛び去つて行きました。

ストックは、まだ呆然として、リドルもまた体に走る電氣で立ち上

がることができません。

ただ一人の心の中は、同じことを思っていました。

(悪魔に田をつけられるなんて。まずいことになつた。これからどうな)

一人が口をきけるようになつたのは、サンサンと輝く太陽がのぼるところでした。

## 第4話悪魔（後書き）

まだまだ修業中です。よかつたら評価と感想をできたりおねがいします。読んでいただきありがとうございます。

## 第5話 光る森（前書き）

再び小麦畑にてた2人だったのですが・・・

## 第5話 光る森

次の日の夜、小麦畠で一人は、まず何から始めるかを考えました。  
「とりあえず、歩けばいいよね？君には足がないから、足を作ろ  
う。そうだな？とりあえず太めの枝を4本とつる草を探そう。どこ  
かにいいのがあればいいけど。」

リドルはどんな風に足を作らうかウキウキしていた。

「あそこに森が見える。君にも見えるかな？」

ストックの指さす方向に薄く霧がかかった森がみました。

一人は、森に向かうと、入り口へしきところで立ちすくんでいま  
した。

入り口から見た森の中は、木が月の光をさえぎるほどおいしげつて  
いました。

「せえので一緒に入るつか？」

リドルが田をつむりながら、手をつなごうとしたが、とおりぬ  
けてしましました。

「うん。」

ストックは、そんなリドルを見てクスッと笑い、透りぬけたリドル  
の手に、自分の手をかさね田をつむりスーっと息をすいました。

「せえの」

二人は、大きな掛け声とともに一步ふみだしました。

田をあけるとさつきは見えなかつた一つぶの星のような光と、風  
もないのに木々がざわざわと葉をゆらしました。

「こわがってる場合じゃない。枝とつる草を見つけないと。ここら  
へんの木は大きすぎる、もっと奥に行つてみよう。光の方へ行けば  
怖くないし。」

リドルは、光の方に何があるのか気になつていました。ストックは、

木々のざわめきに驚いて、また目を閉じて立ち止まつてしまひました。リドルは、ストックに

「大丈夫。行くぞ。」

と、いと歩き出しました。ストックも怖いながらも目を開けてリドルについていきました。

良い木とつる草のどちらも見つからず、どんどん歩いていくうちにまばゆい光を放つところに一人は出ました。

そこは太陽のような光がさんさんと輝き、木たちが喜んでいるかのように葉を揺らしていました。

「あ、ちょうど良さそうな木があつた。」

リドルはストックに木の横に立つてもらい、ストックの身長より少し高いところで木に印をつけました。

すると、木が急に真っ赤に染まり、枝をぶんぶんとふったのです。

「あなたたちズーラにいつたい何したの？」

2人が後ろをむくと、一人の女人人が立つていた。とてもきれいな人で、白いドレスを着ていて、見たことのないような宝石を身に付けていて、きれいな緑色に光る石のついたステッキを持っていた。2人はとまどいながらもその人に何をやつたのかを話した。女人人はうなずくと、空に向かつてステッキをふりあげました。すると、たちまちその木の上だけ雲がもくもくとあらわれ、やがて雨がザーザーと降りました。雨にぬれた木は落ち着いたのか赤みがきえて、元の木に戻りました。女人人は木にニコッと笑うと

「ズーラ。落ち着いた？この子たちは悪気はないみたいだから許してあげて。ほら、あなたたちも謝りなさい。」

女人人に言われて2人はわけもわからなまま木に謝りました。

「さてと一件落着。あ、ごめんね。遅れたけど私は、このルーアス森の番人のリーフル。よろしくね。ちなみにこの木はズーラよ。なんか言いたそうな顔だけど言わないでいいよ。全部答えるから。リーフルはそう言うと、2人の考えていた質問の答えを全部言つてくれました。2人はリーフルは心が読めることにビックリしました。

ルーアス森は木の楽園であること。木たちには全部に心があり、名前があることを知りました。

2人はリーフルに森に入った理由を話しました。するとリーフルは

「木たちにいらない枝やつる草がないか聞いてみるわ。」

リーフルはまたステッキを空にかかげると、今度は先の石の光がパ一ツと飛び散ると森の木たちの上に落ちました。2人がそれを見て口をあけてボーッとしていると、リーフルがステッキをおろして耳をすますと

「ちょうどいい枝があつたみたい。風に乗せて送つてもらうわ。」

ドッスーンっと枝が4本ストックの体を通り抜けて落ちた。

「あぶないじゃないか。」

ストックはびっくりして言つた。

「ごめん。ちょっと落とすところを間違えたわ。つる草じゃないけどひもなら家にあるわ。そろそろ外の世界は日が昇るころよ。よかつたら送るけど？」

リーフルの言つたことに2人はあせりました。

「まずい。気付かれる前にベッドに戻らないと怒られる。」

リドルは怒られることを想像しておびえました。

「僕もそろそろ帰らなくきや。」

ストックは眠くなっていました。

「じゃあ決まりね。2人ともここにたつて。あとは風に身をあずければいいから。じゃ、さようなら。」

リーフルは2人にそう言つとステッキを2人の足に向かって振りました。すると、風が2人の体を高く高くもちあげました。2人が別れを言おうと下を見たときはもうリーフルの姿も、きれいだつた光も見えなくなっていました。2人はいろんなことにとまどいながらも楽しい気分で風に乗つていました。リドルは町に帰る途中で眠つてしましました。

「コーンコーン」と町の時計が12時を指したとき、リドルは起きました。

「ここまで寝てるんだ。もう寝だぞ。」

ビングの声にリドルは安心しました。

「昨日のは全部夢だつたんだ。」

リドルは急いで着替えていつものヨーロピングの手伝いをしました。

夜になり、自分の部屋のドアをドキドキしながら開けたが、スト

ックはいなかつた。

「やつぱり夢だ。」

ふ一つとため息をついてリドルはベッドに入り眠りました。

## 第5話 光る森（後書き）

久しぶりの投稿です。お待たせしました。

## 第6話 真夜中の客（前書き）

今までのことを夢とおもっていたリドルの前に真夜中の客されは…

## 第6話 真夜中の客

月の光がリドルの部屋を照らした時、変な行進曲を流しながら、黒い翼のつけたバイクにのったあの悪魔ルースがやってきました。  
「たしかこの町だよな。とりあえず町の中をとんでさがしてみるか。」

「メモをみながら、ルースはだれかをさがしているようでした。リドルはあまりにうるさい行進曲とバイクの音に耳を覚まし、窓をのぞくと、町の中をキョロキョロしながらルースがバイクに乗つて空をとんでいるので、

「あつまた僕は、夢を見ているんだ。」

リドルは、心に言いきかせてベットにもどり、すると

「夢じゃねえよ。久しごりだな。リーフルから手紙とつる草を届けてくれつて頼まれたから届けにきてやつた。感謝しな。」

リドルは、ルースから手紙とつる草を預かると

「感謝の代わりに血をすこし頂こうかな。」

「と二ヤリとルースは、鋭くとがつた歯を見せた。

リドルは、一目散にドアへ走りドカーンと大きな音をたてて激突した。

「冗談だよ。大丈夫か？あんまり驚いてるからすこしからかってみただけさ。それに俺は、グルメだからお子ちゃまと男の血には、興味ないから安心しろ。」

ルースがリドルを見て笑つていると下から

「おーいなんかすごい音がしたが大丈夫か？」

ビングの声です。

ルースは、またリドルを見てニヤつと笑うとコドルの声を使って言いました。

「大丈夫、ベットから落ちただけだよ。」

リドルは、びっくりして声がだせませんでした。

「 そ、う、か。」

ビングは、ルースの声だと知りもせず寝てしまいました。

「 あ、あおもしろかつた。そろそろおなかも減ったし美しい乙女のいる町にでもくりだすかな。じゃあまたな。」

つと言ひつとまた行進曲をながしながらルースは、バイクに乗つて月の方へきえていつてしまつた。

## 第6話 真夜中の客（後書き）

やっと更新です。すこしこつもとちがつ感じてしあげました。できたら次回も読んでください。

## 第7話 つる草騒動（前書き）

リーフルが送ってきたのは、とんでもないつる草でした。

## 第7話 つる草騒動

リドルは、ほっとため息をついた。  
そしてベットの上でリーフルからの手紙を読みました。  
手紙には、こう書いてありました。

「こんにちは、リドル。つる草を送りました。そのつる草ちょっとと  
攻撃的だからきつつけた。それと木は、ストックくんがもつてい  
るわよ。じゃあがんばってね。追伸、つる草は、ピシッと伸びばすと  
言つ」とをきくわ。」

リドルは、首をかしげました。

(攻撃的つてどうことだらつ?)

その時、リドルの足を何かがピシッと攻撃しました。

「痛い。」

見る限りリドルの足につる草がヘビの様に「口」口と巻きついて  
ピシピシと足を攻撃していました。

リドルは、ビックリしてベットに倒れて氣絶してしまいました。  
その時、木を持ったストックが窓からスースーと入ってきました。  
「なに、つる草と遊んでいるのさ? あつ絡まつてとれないのか?」

ストックは、リドルにまきついたつる草を、手慣れた手つきでとる  
とピシッとのばしくて、クルクルとまとめて縛りました。  
リドルは田を覚まして、その光景に田を丸くしました。

そして、ストックの持っているつる草をビクビクしながら突きました。

つる草は、やつれまでのことがつその様にただのつる草になつてこ  
ました。

「せつきから何やつてるの?」

ストックは、冷たくリドルを見つめました。

「このつる草、さっきまでヘビみたいに一ヨロニヨロしてた。」

「と、ビクビクしながら言うリドルに、ストックは笑いだしました。

「ハッハハそんなわけないじゃないか。」

リドルは、馬鹿にされた気分になり、ストックにリーフルからきた手紙を見せた。読み終わったストックは、青ざめた顔でふるえました。

「僕がさつき触ったのは、まだ生きてたってこと。」

ストックは、つる草をリドルの方になげました。

リドルはつまくよけるとつる草は、窓の外に落ちてしまいました。

## 第7話 つる草騒動（後書き）

読みいただきありがとうございます。  
は、未完成ですが修業しておられますので、よろしください。

まだまだ文章

## 第8話 真夜中の騒動（前書き）

つる草はただのつる草では、なかつた！一人は、さてどうしたのやら

## 第8話 真夜中の騒動

「どうするんだよ？ 落ちちゃったじゃないか。」

「知らないよ。 なげるのが悪いんだろ？。」

二人が言い争いをしているとチャリンチャリンと音がするので見てみると町の奥から白くてきれいな光が見えました。よく見ると光の中に白い翼のついた自転車にどっしどと座つたおばさんが乗っていました。

おばさんせ、リドルたちの窓の前で止まるといよいよとつる草を取りました。

「あんたたち、せっかくこんないいつる草を持つているんだから、捨てるんじゃないわよ。持つてればきっと、いいことがおこるかもよ。」

口をポカーンとあけた一人に、おばさんせつる草を渡すと、クスクスと笑い自転車のベルをチャリンチャリンと鳴らすと過ぎ去っていきました。

「なんだつたんだろう。まあでも恐いけど、このつる草を使うしかないよな。

リドルは、決心してつる草を握った。そして、そんなリドルを見て、ストックはこわいながらも、リドルと一緒につる草を握りました。でも、やっぱり恐かったのか、一人とも手をパッと、放してしました。

「わあつる草は、そこにおいといて。作りたいものはもう、決まつ

ているんだ

リドルは、本棚から古い本を取り出すと、ページをあけてストックに見せました。

「竹馬？」

ストックは見たこともないような乗り物に、ビックリしました。リドルは、ストックの身長よりすこし長めに木を切り、本をみながら不慣れな手つきで竹馬を作りました。

## 第8話 真夜中の騒動（後書き）

読んでいただきありがとうございます m(—)m まだま  
だ不慣れな私ですが、何かアドバイスがありましたら、どんどんお  
ねがいします。

## 第9話 竹馬（前書き）

ついで、竹馬の材料は、そこありました。  
それでどんな竹馬ができたのでしょうか？

## 第9話 竹馬

リドルの作った竹馬は、つる草が丈夫で、どんなにのばしても縛り付けても、切れませんでした。

足を置くステップの部分は、木の木目がほど良い滑り止めの役割をして、それでいてかるかつた。

「完成だ！さあ、この本の絵のように乗つてみてくれよ。」

リドルは、できた竹馬をストックに渡すと、キラキラと輝く目でストックを見つめました。

「なんか違う気がするけど、まあいいや。」

ストックはさつと、本の絵を見て竹馬に飛び乗りました。

すると、竹馬はストックを乗せたままドッシーンっと、地面へ真つ逆さま。

さすがのビングもその大きな音で飛び起き、リドルの部屋へ行きました。

「リドル、大丈夫だか？」

ビングがリドルの部屋に入ると、ベットの下で頭をさすりながら座つている、リドルの姿を発見しました。

「イタタ、ベットから落ちちゃった。大丈夫、たいした事ないよ。」

ビングは、リドルの頭をさすりました。

「気をつけるだよ。今、氷を持ってきてやつから。」

リドルは、ビングが部屋を出て行くのを見届けたあと、ベットの下に隠れていたストックに

「今日は、竹馬を持つて家に帰つて練習！ 明日、夜に麦畑で会おう。」

そつとつてストックを窓から追い出しました。

そしてそのあとすぐに、冷たい氷の入った水袋を持ってビングがもうつてきました。

「窓を開けると、風邪をひこちまつや。ほれ、頭だせ。」

ビングは窓を閉めると、やわしくリドルの頭に水袋をあてた。

「父さん、もうほんとに大丈夫だから。」

リドルの言ひことにビングは、つなづくとリドルの頭をなでて部屋へ戻りました。

リドルはビングの後姿を見ながらいつか、最近起じつた不思議な出来事を全部ビングに話そうと思いました。

そうして、リドルは暖かいベッドに入りました。

## 第9話 竹馬（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

## 第10話 大騒動（前書き）

竹馬ができた。二人は、いつもの麦畠で会う約束をする。そしてその朝、なにやら外が騒がしです・・・

## 第10話 大騒動

時計の針が12時をさした頃、  
「キャー」

つと大きな悲鳴が聞こえました。

「なんだ。」

びっくりして飛びきました。

そして、窓を開けて外を見ると、竹馬がひとりでに歩いては倒れた  
ちそして立ち上がりを繰り返していました。

リドルは、田をこすつて見直すとストックが町中で竹馬を練習して  
いました。

町は、

「キャー キャー」

つと悲鳴をあげているおばさんや竹馬を前に幕を構えているおじさんもいました。

ストックは、竹馬に集中していて町の人々に囲まれているのにぎず  
いていませんでした。

「なにやってんだ。あいつ。」

リドルは、どうしたらよいかわかりませんでした。

すると、下からドンドンッとドアをはげしく叩く音が聞こえてきま  
した。

「おーい、ビングさん。」

お隣のティルおじさんです。

「そんな、叩かなくてもわかるよ。ドアが壊れちまつ。」

ビングは、ドアを開けた。

「ビング、町にきてくれ変なものがあるんだ。」

それを聞いてビングは、ティルおじさんと一緒に家の裏の町に向か  
った。

そしてついたビングはその光景に呆然とした。

「ビングさん。おめえさん、さつきの悲鳴聞こえなかつたのかい？」

ティルおじさんの問いかけのビングは、首をたてにふつた。

それもそのはず、ビングは悲鳴が聞こえたと時、大いびきをかけて寝ていたのだ。

「こりゃあ、親父の本で見たな。たしか、竹馬だつたかなあ。」

ビングは、竹馬を見ながら考えた。

「その竹馬ちゅうのは、ひとりでに動くもんなのか？」

2人は、呆然としてしまった。

そうこうしているうちに、パジャマ姿のリドルが猛スピードで走ってきて竹馬を奪つていった。

## 第10話 大騒動（後書き）

おまたせしました。まだだつづきます。

## 第1-1話 竹馬試練（前書き）

竹馬騒動、猛スピードで終わりました。しかしながら竹馬の試練  
が・・・

## 第11話 竹馬試練

「今のおまえさんは、リドルじゃないか？」

ティルおじさんは、首をかしげた。

ビングは、うなずいて何も言わなかつた。

その頃、まだリドルは走つていた。

「竹馬返してよ。」

ムツとしながらストックは、リドルを追いかけて飛んでいました。

「町を騒がしといて、何言つてんだよ。家で練習しろって言つたら。

走るのをやめてリドルは、ストックを怒りました。

ストックは、ワーワーっと泣き出しました。

「わかつたよ。もういいから、ここで練習しよう。」

リドルはストックをなだめて、竹馬を渡しました。

そしていつのまにかまた、あの小麦畑についていました。

ストックは、鼻をすすりながら竹馬に乗りましたが、すぐに落ちてしましました。

今度は、リドルが竹馬に乗つてみました。ストックに比べて乗ることもできませんでした。

2人は、何度も竹馬に乗ることに挑戦しました。でも、できませんでした。

リドルの顔と足は、あざやすり傷があちらこちらになりました。

「大丈夫？」

ストックがリドルの傷を見ながら言いました。

「大丈夫。これぐらい平気だよ。ストックこそ大丈夫？」

リドルは少し涙目でストックに笑いかけた。

「ぼくは、怪我することすることないから。」

ストックは、さみしそうにしていました。

「そつか。」

リドルは、何を言つてあげればいいのか、わかりませんでした。

「あーもうじれつたいわね。」

2人は、見知らぬ声にビックリして辺りを見回しました。  
するとガサガサと小麦畠の中から、小さな七色に光る美しい翼をつけた少女が不機嫌そうな顔でこちらを見つめっていました。

## 第1-1話 竹馬試練（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

## 第1・2話 謎の少女（前書き）

町での騒動のあと、一人は竹馬の練習を始めました。するとその時、二人の目の前に不思議な少女が現れたのです。

## 第12話 謎の少女

その少女は、光り輝く赤い翼をつけていた。

「見ていられませんわ。竹馬は、飛び乗るものではございません。一人で乗れないのなら、一人で協力しなければいけませんわ。いいですこと！」

「協力ですわよ。」

二人は、少女の話より翼に見とれていました。

少女の翼は、白い純白の翼に変化していました。

「聞いていますの？だから私は人間の相手は、いやだと言ったのよ。じろじろとこの私、シーグルの美しい翼を見るんですもの。・・・どうやら少女は、シーグルといつらしい。」

ぶつぶつと愚痴を言いながら、一人の言葉を待たずに虹色に輝いた翼を広げて飛び去った。

二人は、シーグルの言つた「協力」について、考えながら竹馬の練習をはじめた。

考えた結果、リドルが竹馬を持ち、ストックが竹馬に乗ることになりました。

一歩、一歩進みます。慣れてきたところで、リドルが竹馬を放しました。

するとストックは、地面上に一直線に倒れました。

「僕は、大丈夫。続けよう。」

それからなんども、地面に倒れたのにストックは、あきらめませんでした。

そのうち、だんだん怖さがなくなつたのか、リドルが支えなくとも少しづつ竹馬で歩けるようになりました。

「やつたねストック、竹馬に乗れたね。」

飛び跳ねてリドルは、大喜び。

「さあ次は、リドルの番だよ。一緒に竹馬に乗つて一人で町を歩こ

うよ。」

二人は、また練習をはじめました。今度は、ストックが竹馬を持つリドルを支えました。

そして、とうとう二人は竹馬に乗れるようになりました。

「あとは、どうやって町を歩くかだね。」

ふらふらしながら竹馬に乗ったストックが不安な顔をうかべています。

「僕は、ビングに全部話して相談しようと思う。いいかな、ストック？」

決心したようなリドルをストックは、眩しく感じた。

そして、黙つてうなずきました。

二人は、町へ戻つていきました。

第1-3話 歩く光（前書き）

ビングにすべてを話した二人。  
町は、歩けるのか？

## 第13話 歩く光

家に戻つたりドルは、ストックのことをそして彼の夢を、自分は叶えてやりたいと思っていることを全部話しました。

ビングは、黙つて聞いていました。そしてすこし溜め息をつき、リドルの頭をなでました。

「町のみんなに話すのは、明日にしよう。一人とも、今日はもう寝なさい。ストックくんは、リドルと一緒に寝なさい。」

リドルは、ビングの言葉にピックリした。

「父さん、いいの？」

ビングは、大きな声で笑つた。

「息子の嘘か真実を言つてるくらいわかるさ。町の皆もそうだよ。おまえは、俺の息子なんだぞ。」

リドルの目に涙が溢れた。

ストックは、目に涙を溜めながらビングに頭を下げました。  
そして二人は、明日に備えて眠りにつきました。

窓に光が差し、二人の部屋を太陽が明るく照らしました。  
鶏達が鳴き、村の人達もでてきました。

朝のパンを買うもの、隣同士の会話、馬車で急いで出かけるもの、イムル町の朝がはじまります。

「二人とも、起きなさい！ 朝！」はんができたぞう。」

ビングの声に一人は、飛び起きました。

なにしろ、昨日のことでの一人は疲れ果てて、ぐつすり寝ていたのです。

起きた一人を待っていたのは、こうばしいふかふかのパン、やわらかいチーズ、あたたかいスープでした。

「さあ食べたら今日は、忙しいぞ。まず、みんなにストックを紹介しないとな。リドル、町のみんなを呼んできてくれ。

「ストックは、すこしあめかしをしようか。」

ビングは、にやりと笑うとリドルのよそ行きの服を出して、ストックに着せました。ビングの目から見ると服だけが立っているように見えます。

その間、リドルは町のみんなに家に集まるように呼びかけていました。

リドルの家の前は、イムル町の人々でいっぱいになりました。

「みんな、聞いてくれ。」

ビングは、町の人々にストックのことを話しました。

「みずくさいじゃないか、ビング。町のみんなは、そこにいるストックを信じるぜ。見えないのが何だ、町を歩きたいなら歩きな。」

町の人々は、ストックに温かい言葉をかけました。

そして、町の人々の協力でストックは、町を竹馬で歩きました。一

歩、一步、歩くたびにストックは、目から涙が溢れました。

「ありがとう、みんな。ありがとう、ビング。ありがとう、リドル。」

小さな声でストックは、そう言い続けるとストックの体は美しい光に包まれ、泡のようになるとはじいて消えていきました。

「ストック、笑つてた。」

リドルとビング、町の人々全員が光に包まれたストックの笑顔を見ました。

「ぼくも、ありがとう。」

リドルは、またストックと会える気がした。

## 第1-3話 歩く光（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

結末に色々悩みました。納得のいかない方は、ごめんなさい。でも、またこりずにかきます。

新しい話ができましたら、またおねがいします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7355a/>

---

歩く仲間

2010年10月28日06時28分発行